

図画工作・美術における幼小中高一貫カリキュラム構造の検証 ～〔共通事項〕を基盤とした附属4モデルの提案～

西村 徳行（東京学芸大学 教職大学院 教育実践養成講座 美術・工芸教育 SP）
相田 隆司（東京学芸大学 美術・書道講座 美術科教育学分野）
笠原 広一（東京学芸大学 美術・書道講座 美術科教育学分野）
朝野 浩行（東京学芸大学 美術・書道講座 美術分野/附属幼稚園長）
石井 壽郎（東京学芸大学 美術・書道講座 美術分野）
武田 渉（東京学芸大学附属世田谷小学校 図画工作科）
守屋 建（東京学芸大学附属小金井小学校 図画工作科）
鳥居 瑠華（東京学芸大学附属大泉小学校 図画工作科）
○ 桐山 卓也（東京学芸大学附属竹早小学校 図画工作科）
栗田 勉（東京学芸大学附属世田谷中学校 美術科）
大根田友萌（東京学芸大学附属小金井中学校 美術科）
杉坂 洋嗣（東京学芸大学附属竹早中学校 美術科）
嶽 里永子（東京学芸大学附属国際中等教育学校 美術科）
神田 春菜（東京学芸大学附属高等学校 美術・工芸科）
柴田 琢磨（東京学芸大学附属特別支援学校）
町田 理恵（東京学芸大学附属幼稚園）

代表者連絡先：nishimur@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】図画工作科 美術科 工芸科 一貫カリキュラム 共通事項

1 本プロジェクトの目的

本プロジェクトは、学習指導要領、幼稚園教育要領及び教科書内容の分析を基に、コンピテンシー・ベースの〔共通事項〕を基盤とした図画工作・美術・工芸の幼小中高一貫カリキュラム構造を検証するものである。カリキュラム構造を豊富な実践事例と共に示すことで、学校種間の学びの連携を促し、教師のコンピテンシー・ベースの教材開発力育成に寄与するものとする。

本プロジェクトは、附属学校研究会図工・美術部会と幼稚園、大学、他大学の研究者との連携によって検証を行うものである。各附属学校の特色を生かし、幼小中高一貫カリキュラムを4つの学芸大附属モデルとして提案するとともに、インクルーシブ教育の視点からも検討を行う。本学の特性を生かした幼・小・中・高・特別支援・大が連携する教育研究の成果は、学部学生・大学院生の教育に還元されると共に、教育現場や教育政策へ積極的な提言ともなり、持続可能な本学の教育に寄与するものと考えている。

2 本プロジェクトの実施内容

（1）学習指導要領、幼稚園教育要領の調査・分析

初年度は幼小中高一貫カリキュラム構造検討の基礎研究として、学習指導要領及び幼稚園教育要領の調査・分析をおこなった。中学校美術科及び高等学校美術科・工芸科では〔共通事項〕が知識とし

て位置付けられながら、小学校図画工作科では一項目が「知識」、もう一項目が「思考力、判断力、表現力等」とされ、資質・能力として一貫性がないこと、また幼稚園においては総合的な活動内容が主となることから、学習指導要領及び幼稚園教育要領の領域や項目を柱とした一貫カリキュラム構造を検討することには限界があることが明らかになった。

そこで幼小中高の表現・図画工作・美術・工芸に関わる教師が、各学校段階の内容にどのような「つながり」を意識してカリキュラムを設定しているのか、附属4地区の事例をもとに検討するワークショップを実施することにした。

(2) 校種間の「つながり」を意識した授業研究ワークショップの実施

幼小中高 表現・図画工作・美術・工芸「つながり」ワークショップ

- ・日時：2021年12月26日(日)13:00~15:00
- ・開催：対面とオンラインのハイブリッド開催
- ・会場：西5号館2階 美術科教育演習室
- ・参加人数：15名(幼稚園2名、小学校3名、中学校3名、中等教育学校1名、高等学校2名、大学2名、教職大学院生2名)

学芸大附属4地区から、校種の「つながり」を意識した、異校種を架橋する図画工作・美術・工芸科の実践事例を紹介した。

世田谷地区(附属世田谷小学校・附属世田谷中学校・附属高校)は、平成13年度に文部科学省指定研究として小中高教育課程一貫カリキュラムの作成を試みている。高校生がキュレーターとなって展覧会を企画し、それぞれの作品が中学校に展示されて相互鑑賞を行うなど、造形活動を柱とした交流が行われた。小学校低学年ではつくり出す喜びや関心・意欲をキーワードに、「ごっこ遊び」等の幼稚園の学びの延長となるよう授業づくりが行われている。

小金井地区(附属幼稚園小金井園舎・附属小金井小学校・附属小金井中が校)では、児童生徒が問題意識を抱かせるような出合いや経験ができる場の設定を大切にしている。幼児教育は学びの環境を大切にしていることから、小学校低学年では「ごっこ遊び」や造形遊び等を充実させ、また小中連携では図工と美術の違いや共通点を、活動を通して繰り返し児童生徒に問う試みが行われている。

大泉地区(附属大泉小学校・附属国際中等教育学校)では、小学校において教科横断的な探究が行われている。国際中等教育学校では、他教科と連携した学際的な単元がIB教育として位置づけられていることから、両者のつながりを意識したカリキュラム作成が模索されている。

竹早地区(附属幼稚園竹早園舎・附属竹早小学校・附属竹早中学校)では、幼小中それぞれの「文化」を尊重しながら、トップダウンの「一貫」ではなく、互いの共通項を見出しながら行う「連携」カリキュラムを作成している。幼小での経験の積み重ねが、中学校での美術の学びを深めていくことから、成長の4つのステージと8ステップを設け、学びのつながりに留意している。

ワークショップを通して、関係者がイメージを共有することの重要性が改めて認識された。

〔共通事項〕を基盤とした、コンピテンシー・ベースの表現・図画工作・美術・工芸をつなぐ、幼小中高一貫カリキュラム検討ワークショップ

- ・日時：2022年12月26日(日)13:00~15:00
- ・開催：対面とオンラインのハイブリッド開催
- ・会場：附属国際中等教育学校 美術室
- ・参加人数：14名(幼稚園1名、小学校4名、中学校3名、中等教育学校1名、高等学校1名、大学2名、教職大学院生2名)

初年度は基礎研究として、学習指導要領及び幼稚園教育要領の調査・分析と、幼小中高の「つながり」を意識した実践事例を相互に紹介した。一貫カリキュラムを作成するには、幼児期に育まれた力が小学校・中学校・高等学校にどのようにつながっているのか、関係者がイメージを共有するとともに、それぞれの校種でどのような工夫がなされているのか、取り組みへの相互理解が求められる。

これをうけて、第二年度は校種間の「つながり」に位置づけられている題材が、〔共通事項〕を基盤としながら、どのような資質・能力の育成を目指しているのか、附属4地区の特性を具体的な実践をもとに検討をおこなった。なお、本ワークショップでの幼小中高一貫カリキュラム構造の検証は、〔共通事項〕を基盤とした附属4モデル」として、本プロジェクトの研究成果において報告する。

（3）各校種教科書及び全国造形教育研究大会における調査・分析

一貫カリキュラムを作成するには、育成される資質・能力のつながりについて、関係者がイメージを共有するとともに、それぞれの校種での工夫や取り組みについて、相互理解することが求められる。第二年度は、日頃接することの少ない異校種の教科書を調査・分析するとともに、全国造形教育研究大会にも参加し、異校種の教師が接続期にどのような点に配慮してカリキュラムを作成しているのか、調査・分析を行った。

教科書等には円滑な接続を実現するために、これまでのふりかえり等を促す構成になっているが、教師は内容的なつながりと共に、児童・生徒が資質・能力を発揮する場面やその姿を想定しながら授業づくりを行っていることがわかった。このことから、普段の授業づくりの中で、円滑な接続のために教師が意識している授業づくりの視点について、その実態をあらためて調査・分析することの必要性を痛感した。なお各校種教科書の調査・分析では、すべての検定済み教科書（小学校図画工作科2社、中学校美術科3社、高等学校美術2社（1社は二種類の教科書を発行しているため実質3社）、高等学校工芸1社）を対象とした。

3 本プロジェクトの研究成果

（1）〔共通事項〕を基盤とした附属4モデルの提案

世田谷モデルのキーワード：「協働」

世田谷地区は学習場面における「協働」に着目した。コロナ禍においては人と人との接触をなるべく避ける学習環境が整備された。しかしながらコロナ禍以前の日常へと戻りつつある子供たちは、他者と関わることに喜びを感じ、日々過ごしている。「協働的な学び」は新学習指導要領においても重視されているが、「子供は本来、協働が好き」という視点で子供が協働する多様な姿を見つけ、それを強化していくことが、一貫カリキュラムを貫く視点として有効であると考えた。しかし小学校低中学年では密な関わりを欲するが、高学年では個別、また中学校では個別に設定しても自然とグループになることも明らかになった。幼児・児童・生徒の実態を考慮し、「協働」の在り方を検討した、「協働」をキーワードとした一貫カリキュラム世田谷モデルの可能性を示した。

小金井モデルのキーワード：「身体性・感性」

小金井地区では「子供は触りながら考える」ことに着目した。図画工作・美術には〔共通事項〕として形や色等が示されているが、学習過程では素材の質感に対する手触り等の触感、また思いを表現へと変化させる際の身体性が、造形活動を貫く柱として存在する。特に感性や表現に関する領域を「表現」として大きく捉える幼稚園との連携を考える場合、この「身体性」や「諸感覚」は両者を架橋する重要なキーワードとなる。諸感覚等を包含する「身体性・感性」をキーワードとした、一貫カリキュラム小金井モデルの可能性を示した。

大泉モデルのキーワード：「プレゼンテーション・伝える力」

大泉地区は IB 認定校である。小学校では C 領域「創造表現」において「100 年後に残したい価値あるものとは？」という問いから、自らの思い出や独自の視点を基に「探究作品」をつくる。展覧会では個人ブースを設け、作品の意図や特徴がうまく伝わるように工夫しながら展示すると共に、プレゼンテーションを行う。また国際中等教育学校の高校 3 年生では、展覧会そのものをプロデュースし、アーティストとオーディエンスの関係に着目する。一貫カリキュラムとしては、表現と鑑賞を一体的に捉えながら、作品の段階的分析等を通して、いかに他者にその魅力を伝えていくのか、「プレゼンテーション・伝える力」キーワードにした一貫カリキュラム大泉モデルの可能性を示した。

竹早モデルのキーワード：「アイデンティティ・自己肯定感」

小学校では学習のふりかえりとして、「いいな」カードを書く。自らが感じた「いいな」を記録することで学びを深め、次への学びにつなぐだけでなく、アプリを通して友だちとも共有する。言葉だけでは限界があることから、写真や動画を用いて表し、自分自身の考えや思いを醸造していく。ICT を活用した「いいな」カードは、教師にとっては「子供の姿のみとり」の新しい形であり、学習支援にも活用できる。自らの記録を蓄積しながら、その記録を通して友達や教師と交流することで、子供は自らの学びをつかみ、自分の変化を実感する。このことを通して子供たち一人ひとりが自らの「アイデンティティ」を構築し、ひいては「自己肯定感」を高めることになると考える。「アイデンティティ」と「自己肯定感」が連動した、一貫カリキュラム竹早モデルの可能性を示した。

(2) 今後の課題

中央教育審議会の「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」が示すように、接続期の教育の質的向上には課題が山積している。本プロジェクトをとおして明らかになった、一貫カリキュラム作成のための今後の課題について、最後の述べることとする。

一つ目は「相互理解」である。一貫カリキュラムを作成するには、育成される資質・能力のつながりについて、関係者がイメージを共有するとともに、それぞれの校種での工夫や取り組みについて、互いに検討・理解することが大切である。地域の幼保小や小中学校では、進学先の学校間との連絡進学等の話し合いがもたれている。しかし幼児や児童、生徒の生活面での連絡事項が主で、教科内容までの共有や理解は難しいのが現状である。教科においても具体的な授業内容を相互に示し合う機会がもたれるなど相互理解することが、より充実した一貫カリキュラム作成へとつながると考える。

二点目は「教科の特性を活かした多様なつながり」である。異校種間の連携では、幼児や児童、生徒の発達段階を考慮した連携のあり方について検討がなされている。より連携を強化させるには、幼児や児童、生徒の実態に即した具体的な実践事例を検討することが大切である。この際、教科それぞれの特性が活かされるものとする。本プロジェクトで示された「協働」や「身体性」など、一貫カリキュラムモデルのキーワードも、教科によって多様な姿があり、また教科によって育成しやすい資質・能力としにくいものがある。学びの架橋は主に具体的な授業の場で行われることを考えれば、教科の特性が活かされるつながりを検討することが大切である。

本プロジェクトは本年度で終了となるが、附属学校研究会図画工作・美術部会では附属学校の強みを生かし、主催する公開研究会やワークショップを通じて、図画工作・美術における幼小中高一貫カリキュラムの提案及び検証を継続し実施する予定である。また「学芸公開講座」を活用して、学部学生や大学院生、また教育現場へ研究成果を発信することも検討している。なお本プロジェクトについては、今夏開催される STEAM 教育国際シンポジウムや第 57 回日本美術教育研究発表会 2023 で、本プロジェクトの研究成果を報告する予定である。